

入選

お届けもの

埼玉県 岸町小学校 六年

宮内 彩葉

私の父がコロナになってしまったのは、2年前の冬のことです。私と母と弟は、体調は良かったものの、濃厚接触者として自宅待機をすることになり、私と弟は、家でオンライン授業を受けることになりました。

しかし、私は不満でした。オンライン授業は、画面越しでしか友達と会うことができず、オンラインではできない授業も多く、味気なさが私を満たさずからです。

また、食料品の買い物も母がネットスーパーで頼んでくれていましたが、売り切れも多く、好きなものを自由には買えないようでした。このような状況に直面して私は、

「“当たり前”は、約束されたものではない」と、改めて気づかされました。

それから数日後、家のインターホンが鳴りました。少し待ってからこっそり扉をあけると、そこにはだれも居らず、ドアノブに袋がかかっていた。

袋の中を見ると、新鮮なイチゴが入っていました。おどろいて母に聞くと、いつもいっしょに登校している同じマンションの友達が、届けてくれたようでした。重たい空気が一転し、私たち一家の顔は、うれしさと生き生きとしていきました。

この日のご飯は、今までとは全く違いました。うれしさという名の調味料が加わり、デザートイチゴは最高に贅沢な味わいでした。

父が元気になり、また「当たり前」が戻ってきました。久しぶりに学校に行き、友達みんなにあいさつをすると、帰ってきたのはまぶしい笑顔でした。いろいろな友達が今までの勉強について教えてくれ、私がいなかったときに必要だったものまで、代わりに用意してくれていて、私の胸は、温かい気持ちでいっぱいになりました。

「人が助けてくれるということは、こんなにもうれしいことなのか。」と、心の底から感じました。たくさんのお返しにふれ、目の奥が熱くなって視界がにじみ始め、いつもの教室がまるで水彩画のようになりました。私は涙が目にとまって、ほおを伝いそうになるのを、唇をぐっと噛みしめ、ばれないように目をこすりました。

それから少しして、今度はあのお届けものをしてくれた友達一家が、自宅待機をすることになり、学校に来られなくなってしまいました。

友達にあのときのお返しをしようと、母が私におつかいを頼みました。外に出て、エレベーターのボタンを押しながら、私はふと思いました。「助け合いの輪が、人をつないでいくのだ」と。今度は私がつないでいく番。

友達の家のインターホンを鳴らして、ドアノブに袋をかけ、家へ急ぎ足で戻りました。

「ありがとう」と、そう心でつぶやいて。